

# 中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1596

心配はすべし、心痛はすべからず。  
（山本玄峰）

△解説▽心を傷つけ痛めることは毒である。毒は滞って自らを弱らせる。だから、心を痛めないように心を生かしていこう。一般には「心配するな」というが、ここでは、「心配りをしよう」と勧めている。心配りが自由自在にでき、滞りなく、他人の心を痛めずにいれば、自分の心を痛めることもなくなるのだと説明している。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.2 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1595

「われは知る」「われは見る」ということに執著して論ずる人は、みずから構えた偏見を尊重しているのか、かれを導くことは容易ではない。  
（釈迦）

△解説▽自らの教義や学説に執着して柔軟な心をもたないひとは、それを絶対視して信じて疑わない。正しく学ぶ人は学ぶほどに柔軟になる。あることからのみが清浄に至ると主張し、凝り固まるひとを導くことはとても難しい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.1 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1598

其の未だ度せざる者も、皆亦已に得度の因縁を作す。  
（『仏遺教経』）

△解説▽安楽の岸へ救い渡すべきひとには、これまで教えを説いて導いてきた。たとえその機会がなかった人にも、そのためのよりどころとなる教えを残しておいたので、それをたよりに自ら実践してほしい。釈迦が臨終に際して、残される人々に語ったことばとされる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.4 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1597

是の故に当に知るべし。世は皆無常なり、会うものは必ず離ること有り、憂悩を懐くことなかれ。  
（『仏遺教経』）

△解説▽知らなくてはならない、この世はすべて無常であることを。会う人とは必ず別れる。この世の法則である。だから私（師である釈迦）と相離れても、嘆き愁いに沈んではならない。その上で、今なにをすべきかを考えるべきだと教える。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.3 中村元記念館協力

# 中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1600

色即是空、空即是色

（『般若心経』）

△解説▽趣旨は、すべてのものは空であり、固定的実体を持たない。同時に固定的実体を持たないから変化するすべてが成り立つのである。空の否定的な側面と、肯定的な側面からの見方といえよう。ものごとのあり方を述べているが、否定的、肯定的のどちらに偏つても誤りだろう。空であるから年をとつていくが、空であるから成長するのである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.6 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1599

自今以後、我が諸の弟子、展転して之を行ぜば、則ち如来の法身、常に在して而も滅せざるなり。

（『仏遺教経』）

△解説▽わたし（釈迦）がいなくなった後も、弟子たちが教えである真実を継承し実践していくならば、それは、教えとしての身体となつて、仏の命はいつも近くにある。つまり、真実の実践こそが仏を生かすのだ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.5 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1602

仏法を修行するとは、仏法をならうにはあらず、わがひがごとをやぶるなり。

（一休）

△解説▽仏の教えを実践するとはどういうことであろうか。教えを学ぶだけではない。それだけでは不十分である。ここを勘違いしてはいけない。本当に大事なことは、ひたすら自分の間違いや誤り（ひがごと）を究明して、それを打ち砕いていくことなのであると述べている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.9 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1601

ひきよせてむすべば草の庵にて、とくればもとの野原なりけり。

（慈円）

△解説▽竹や藁や縄を集めて小屋を建てる。しかし、縄をほどこきバラバラになるともとの野原になる。「色即是空、空即是色」である。バラバラになるから小屋を作らないというのはなく、小屋は作るが、永遠ではないと知る。そこに苦の原因である執着を生じさせないのが大事。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.8 中村元記念館協力

# 中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1604

縄元蛇に非ず。己れ計て蛇と為す。  
(沢庵)

△解説▽暗闇で落ちている縄をみて蛇だと勘違いして驚き大騒ぎ。縄に限らず、私たちはこのような過ちをしがちである。落ち着いてみれば縄は縄であり、つまり、蛇は自分の妄想が作り上げたもの。不幸の原因を自分で作って自分で苦しむ。この過ちを智慧の力をもって滅ぼそうというのが釈迦の教えの基本でもあった。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 5. 11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1603

怒りを断つたならば、ひとはやすらかに寝る。怒りを断つたならば、人は悲しまない。毒の根であり、しかも最上の甘味である。その怒りを殺すことを、立派な人はほめたたえる。  
(釈迦)

△解説▽怒りにはよいところがない。感情がたかぶり熟睡できない心の毒である。しかし、それを断つことができる。悲しみもなく、最上の安楽をえることができるであろう。釈迦が何度も強調するところである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 5. 10 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1606

道の人、欲求を知り尽くしている。道の人たちには、つねに自由自在性がある。  
(釈迦)

△解説▽道の人とは、「道を明らかにするため努める人、真の修行者の意味。欲求の性質を知り尽くしているがゆえ、その対処方法、はたらかせ方を知っている。だから、支配されることなく、ざわめきから離れ、束縛されることもなく、自由であり自主なのである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 5. 13 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1605

知の難きに非ざるなり、知を処すること則ち難きなり。  
(韓非)

△解説▽ものごとの真相を知るのが難しいのではなく、その知った真相にいかに対処するかが難しい。もちろん真相を知るのは大切であるが、その気つきを自分のなかでいかに生かしていくか。また他に対して正しく伝えて、よい発展へとつながるか、それが重要であり難しいことでもある。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 5. 12 中村元記念館協力

# 中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

## 中村元 慈しみの心 No.1608

仏典の教えが歴史を超えて人に訴えかけるものがあるからこそ、人々は仏典を読むのであり、もしも歴史的所産とのみ考えれば、仏典を読む必要はなくなる。

（中村元）

△解説▽さらに次のように述べている。「仏典は過去のものであり、悩んでいる自分の心は現代にあるからである」と。それゆえ生きた教えとするには、仏典を自分の問題として読む必要があるだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.15 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1607

この世間の人々は多くはじつに方便を執し、にぎりこみ、それに囚われてる。

（釈迦）

△解説▽方便とは目的にいたる「てだて」のこと。導き手でもある。しかし、それを断定的に捉え、そのみが正しいとなると極端になる。教義や伝統として固まってしまうと導き手とならない。囚われてしまうと固まるのである。固まると動きがなくなり、実践的なはたらきが止まる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.14 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1610

非難されるのは欲せざることである。「しかし」称讃されても、心の平安を得ることにはならない。

（釈迦）

△解説▽心の平安とは動揺したり縛られたりしないこと。非難されると動揺し、称讃されても心の動きとしては揺らいでしまう。動きに流されて自由でないこともある。しかし、自らを制御している人は非難にも称讃にも動ずることがない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.17 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1609

ただ一部分のみを観る人々がこれを論じて互いに争うのである。

（釈迦）

△解説▽一部分しかみないのは、真実（真相）をみていないこと。一部分のみ知っていると自覚しているならば、ありのままみていることになる。問題は、一部分のみを観て、すべてだと思ったり、それを根拠に、論争して争ったりする場合である。そのとき、正しい実践は止まってしまうだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.16 中村元記念館協力